

子どもの本

研究会

【私の一冊】 『ロビンと海賊』

森 正人

エルマンノ・リベンツイ文、アデルキ・ガッローニ絵、河島英昭訳（ホルプ出版一九七九年）

三十数年前に長男のために買った。読み聞かせの時期を過ぎて、手放そうとしなかった。それを三歳下の次男が受け継いだために、綴じ糸も切れ、表紙もはずれかけている。縦三〇・五cm、横二六・四cmの大判の本で、見開きいっぱい広がる画面が二人のお気に入りであった。大胆な構図に、あふれんばかりの物と人を丁寧に描き込んであり、それら一つ一つに目をこらすと、大人でも見飽きない

物語は、灯台守のお爺さんと暮らしていたロビン少年が、イタリアの村を襲ったイギリス海軍に囚われの身となってしまったことから始まる海と空の冒険の数々。スペインの戦艦との戦闘に巻き込まれ、洋上で遭遇した幽霊船にひそかに乗り移って漂流する。助けを求めてきた白い鯨をエイハブ船長からかくまうてやり、カリブ海のトルトゥーガ島に上陸して海賊たちと行動をとる。そのうち、嵐に遭い小さな島に漂着し、そこでロビンソン・クルーソーと名乗る男と会う。そこから海賊達とともにネーモ船長の潜水艦ノーチラス号に乗り込んで、沈没船の宝を引き上げるけれども、スペインの軍隊に捕らえられてしまう。ロビンともう一人だけが逃れ、オランダの発明家コルネリウス・ヴァン・チューリップに助けを借りて気球の船からスズメバチの巣を落とし、空飛ぶ鯨号に仲間の海賊たちを救い出す。そして、ロビンは気球で空を飛ぶ小さな船でお爺さんのもとに帰る。

このようにまことにめまぐるしく展開するが、同時に、メルビルの『白鯨』、デフォアの『ロビンソン・クルーソー』、ヴェルヌの『海底二万里』、大デュマの『黒いチューリップ』など、さまざまな著名な小説が横糸として織り込まれ、複雑な模様が面白く織り出されている。小学校低学年の読者に理解は期待できない。しかし、『白鯨』は別にしても、学年が上がるうちにこれらの作品を読む機会がきつと訪れる。その時に、ロビンの冒険を思い出して、ああそうだったのかと合点するか、くすりと笑えばよい。（2ページに続く）

(1ページ目「私の一冊」の続き)

翻訳はイタリア文学研究者の河島英昭。後年ウンベルト・エーコの『薔薇の名前』を翻訳紹介し、今はダンテの『神曲』の翻訳を進めている碩学である。私は翻訳者が河島であったことに今になって気づき、むべなるかなと膝を打つたことである。この作品を河島が見逃すはずはない。

(尚絅大学学長・こどもの本の研究会会長)